

研究目的



天観(天観)

天に対する認識



地観(地観)

地に対する認識



人間観(人間観)

人間に対する認識

主要研究目的

- 東学関連思想が東洋の哲学的思惟方法を通じて東西洋を融合した世界観を構築したことを究明
- 。相関的思惟とリミナリティの観点から天観地観人間観の自生的近代性の特徴を分析
- 東学思想と大巡思想の比較を通じて、参東学が有する哲学的思惟方法論としての完成度を検証

期待効果

- 東洋の自生的近代性が近代科学哲学と対等な哲学的思惟方法として価値を再発見。現
- 代社会の危機に対する代案的近代性としての可能性の探索

研究の範囲および方法

研究範囲

- 東学思想と大巡思想の天観(天観)、地観(地観)、人間観(人間観)を中心に自生的近代性を考察。初期東学(水雲の4年間の活動期)を中心に、大巡思想の「参東学」と比較研究

理論的枠組み

- リミナリティ(Liminality):宗教的变化を通過儀礼の中間地帯として説明する
- 理論の適用。再活性化(Revitalization):外部の脅威に対応した伝統の活性化過程の分析
- 相関的思惟(correlative thought):東洋の哲学的思惟方式としてのアプローチ

研究方法

- 細部の研究順序:近代性関連の先行研究分析→自生的近代性の条件究明→天観地観人間観中心の比較分析→結論。文献
- 資料:『東経大全』、『龍潭遺詞』(東学)、『典経』(大巡思想)を中心に分析

研究の理論的基盤



相関的思惟(相關的思惟、Correlative Thinking)

- ◆ 万物の全体をまず見て、その脈絡と関係から部分を理解する東洋の思惟体系
- ◆ 西洋の分析的思惟(Analytic Thought)と異なり、全息的でホリスティック(Holistic)な思惟体系。住所を書く際に
- ◆ 最も遠い国名から書くように、全体から部分へと思考する方式



リミナリティ(Liminality) – 変化の機制

- ◆ ターナー(Victor Turner)が提示した通過儀礼の中間地帯の概念
- ◆ 変化以前と以後との間の境界空間で起こる変形の過程を説明。二分法的な西洋思考と異なり、第三の中間地帯を通じて個人的社会的変化を理解



再活性化理論(Revitalization Movements) – 持続機制

- ◆ ウォレス(Anthony F. C. Wallace)が提示した外部の脅威に対する文化的
- ◆ 対応理論。アイデンティティ危機時に伝統の長所を活用して信念体系
- ◆ を再整備する過程。リミナリティが変化の機制を説明するのに対し、

結論および展望

研究の学術的意義

- 東洋哲学の現代的位相の強化および西欧近代性への代案の提示
- 自生的近代性を通じた東洋思想の独自性と普遍性の再発見

文明の融合可能性

- 東西思惟体系の相互補完的結合モデルの提示
- 代替的合理性と倫理性の調和を通じた新たな文明方向の模索

現代社会への適用

- 大観・地観・人間観の統合を通じた環境危機克服の方案の提示
- 東洋の相関的思惟と西洋の分析的思惟の統合可能性

今後の研究方

- 向 東学大巡思想の実践哲学的側面の探究の拡
- 本 現代科学技術文明と東洋思惟方法論の創造的融合の研究

「東洋の自生的近代性は現代文明の危機を克服する新たな思惟と実践の体系を提供する」